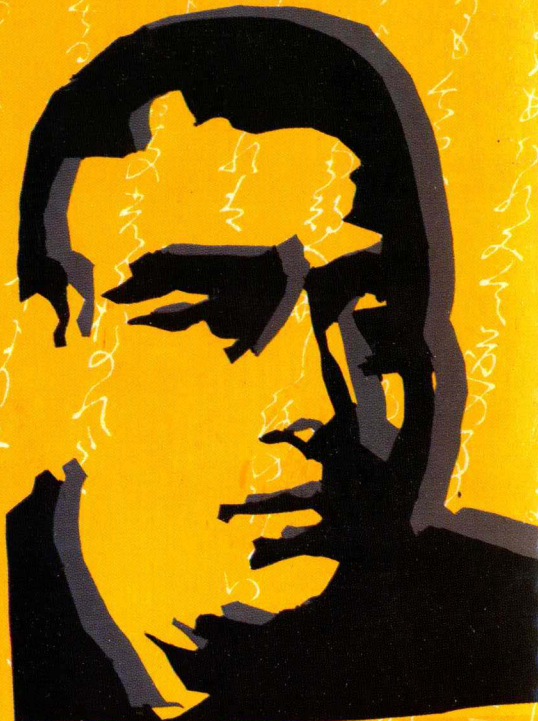


# 歴史の顔

綱淵謙錠



文春文庫





文春文庫

157—4

---

歴史の顔

定価はカバーに  
表示してあります

1984年12月25日 第1刷

著者 綱淵謙錠

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

---

落丁・乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-715704-7

文春文庫

歴史の顔

綱淵謙錠



文藝春秋



《随想集》

歴史の顔

目次

I

戦国武士の実像

11

大名の生活

23

江戸大名とコレクション

37

人を裁く

43

名君の条件

53

II

信玄三方ヶ原に出陣す

65

敵は本能寺にあり

83

上野介に罪ありや

95

義旗ひるがえる

109

Ⅲ

二本松城址の風

131

増上寺断想

143

中山道序説

149

会津の土風と教育

155

Ⅳ

小栗美作

173

榎本武揚

207

西郷隆盛と坂本龍馬

233

和宮親子内親王

247

《あとがき》

275

解説 粕谷一希

279

单行本 昭和55年11月文藝春秋刊



《随想集》

歴史の顔







## 戦国武士の実像

「武道」昭和53年10月号（日本武道館）

1

たとえば、上杉謙信がライバルの武田信玄に塩を送った、という有名な話がある。

これは『常山紀談』という江戸中期に書かれた歴史随筆集に、へ上杉謙信塩を甲斐に送る事」という見出しで載っている。――

武田信玄の領国は甲斐と信濃の二カ国で、ともに海のない国だったので、塩を自国内で手に入れることができなかった。そこで遠く東海の北条氏の領国から購入していた。

今川義元の子氏真は北条氏康と謀ってひそかにその塩の道を閉ざしたので、甲信両国の人民はもとより、兵士も大いに苦しんだ。

ところがこの話を耳にした上杉謙信は、信玄に書を寄せて、「氏真と氏康は塩をもってあなたを苦しめているようですが、これは不勇不義の極みです。わたくしがあなたと争うのは弓箭

にあつて、米塩かてにあるのではありません。どうぞこれからは塩をわが越後からお入れください。  
 へ多寡唯命おほさうきんまただのぞみのままです」と言つてやった。そして商人に命じて、塩の値段も並み値にして送つてやった。

これは戦前の小学校教科書にのつていた話なので、わたくしの年代の者には全く常識化された話であるが、現在の小学生にはどういふ位置にあるのだろうか。

『常山紀談』にはまたへ毛利元就もつりもとむね厳島合戦いづはまあひびたい付盲人間者の事つきまうじんかんじやがある。この見出しをみただけで「あ、あの話か」と、わたくしは小学校の教科書にあつたそのストーリーを思い浮べることが出来る。

こんな話もある。

長尾輝虎てるとら（のちの上杉謙信）は、ある夜、石坂檢校いせんぎやうに「平家物語」を語らせて聞いていたが、源頼政の鶴退治つるえの段を聞いて、しきりに落涙していた。

傍の者どもがふしぎに思つてそのわけを問うと、輝虎がいうには、「わが国の武徳の衰えを思つて泣いたのだ。むかし鳥羽上皇の御代に宮中に妖怪があらわれたとき、八幡太郎が弓の弦を鳴らして『鎮守府將軍源義家』と名乗つただけで、妖怪は消え失せたという。それが頼政の鶴のときには、弓で射たのになお死なず、井野隼人はやとが刀でこれを刺し殺して、ようやく仕止めた。義家が鳴弦を行なつたのは天仁元年（一一〇八）、頼政の鶴が出たのは仁平三年（一一一五

三)であるから、わずかに四十六年しかたっていないのに、すでに武徳の劣ることはるかである。いままた頼政におくれること四百五十年。わたしがまたさらに頼政に劣ることはるかであるから、思わず涙が流れたのだ」と語った。

この話につづけて、相州北条の幕下、佐野の城主天徳寺了伯が、やはり琵琶法師に「平家物語」を語らせて「雨零と涙をながして泣いた話がある。

これは宇治川先陣争いの佐佐木高綱と、扇の的那須与一の段で、二人が死を決して事に向った心根のあわれさに泣いたという話である。わたくしが中学校の漢文教科書で習った、大槻磐溪の『近古史談』冒頭の一文と同じ内容だ。おそらく磐溪は『常山紀談』に材を取って、漢文に翻訳したものであろう。

## 2

『常山紀談』には若干の異本もあるようであるが、手許にある帝国文庫版の中村孝也校訂『常山紀談』(昭4・7、博文館)に収められた史談の数は六三三篇(「拾遺」「雨夜燈」を含む)。これだけの多数の逸話を蒐めた備前岡山藩士湯浅常山(通称新兵衛、名は元禎)の努力には、頭の下がるものがある。しかもこの著作の完成は、元文四年(一七三九。八代將軍吉宗の時代)五月九日付の「自序」によると、常山三十二歳のときらしい。嘗々辛苦したさまがしのばれる。そしてわれわれが子供のころから今日まで、講談・浪花節・歴史小説、あるいは芝居・映

画・テレビなど、多くの媒体を通じて、いつとはなしに吸収していた戦国武将に関する逸話の多くがこの本に由来していることは、一読してみればすぐわかる。

常山自身もその〈凡例〉のなかで次のように言っている。――

〈凡此書天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事実をあつめしるせり。戦国の時勢。国初の風俗。武人の言行。是皆世を觀る人の尤識るべき所にして。是輯録の本意なり。明君。賢佐。乱臣。奸賊の勳愆に具ふべき。自ら其中に見ゆれば。必しも評論をしるさず。〉

つまり〈事実〉と〈勳愆〉を二つの柱としているのである。換言すれば、戦国の時勢、国初の風俗、武人の言行といった歴史的事実を輯録するという学問的態度と、そこからおのずと引き出されてくる、世の勳善愆惡の鑑として役立てようという道德的意図との、二つの目的を備えている、というのである。

したがってそれはたいへん文部省的な好みと合致し、本書中のいろいろな武将逸話がわれわれの小学校や中学校の教科書に採用されることになったのであろう。

〈直江兼統が事〉という話がある。――

越後の侍大将直江山城守兼統は上杉謙信と景勝に仕えたが、景勝が秀吉から奥州で百万石（普通は百二十万石といわれている）を賜わったとき、兼統は米沢で三十万石を与えられ、陪臣のうちでは第一の大祿であった。



「長高く容儀骨がら双なく。弁舌明らかに殊更大胆なる人なり」といわれた。文芸にも明るく、  
 「春雁似<sup>わねにわれがんにたり</sup>吾吾似<sup>わねにわれがんにたり</sup>雁。洛陽城裏背<sup>はなにもむいてかえる</sup>花帰」という、有名な詩もある。

あるとき伏見城で、伊達政宗が懐中から金の銭（大判小判をいうのであろう）を取り出して、  
 並みいる大名たちに見せた。そのころはちょうど金の銭の始まったばかりで、大名たちは「こ  
 れは珍しい」ともてはやした。

やがて末座にいた兼統のところにもその金の銭が廻ってきて、「さ、ご覧なされ」とすすめ  
 られると、兼統は扇の上にその金の銭をのせて打ち眺め、その裏を見るのに女童が羽根をつく  
 ようにポンと打ち返して見た。政宗は兼統が陪臣の身を遠慮して扇の上で見ているのだと思い、  
 「いや、苦しいはござらぬ。手にとってご覧よ」というと、そのことばの終らぬうちに兼統  
 は、「手前の手は謙信公のときから先陣の下知をして采配を取った手でござる。その手にこの  
 ような賤しい物をとると汚れ申すゆえ、扇に載せて眺めたのでござる」といって、その金の銭  
 を政宗のほうに投げもどした。――

というのである。

いかにも金銭に淡泊な戦国武将の典型を思わせる逸話である、と言いたいのであるが、これ  
 に「待った」をかける人がいる。この話は真ッ赤な偽りだ、というのだ。いまは故人となられ  
 た高柳光寿博士である。

博士は長いあいだ東大史料編纂官をしておられ、国学院大学および大正大学教授で、日本歴